



Deborah R. Barnbaum  
THE ETHICS OF AUTISM  
Among Them, but Not of Them

# 自閉症の倫理学

彼らの中で、彼らとは違って

デボラ・R・バーンバウム

柴田正良・大井 学 監訳 重松加代子 訳

勁草書房

# 自閉症の倫理学

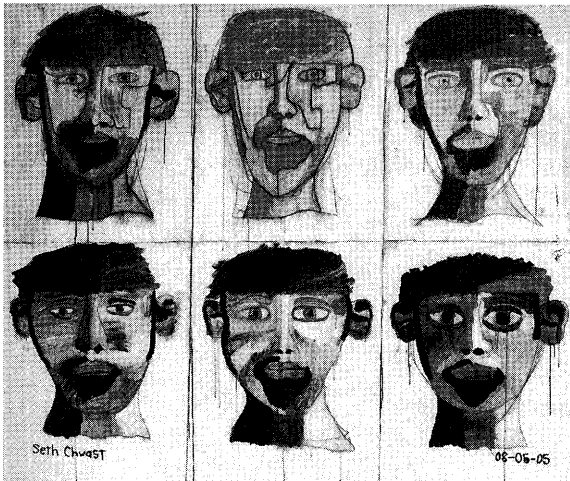
彼らの中で、彼らとは違って

デボラ・R・バーンバウム

勁草書房

自閉症の倫理学

彼らの中で、  
彼らとは違って  
目次



Seth Chwast 6つの自画像

日本語版への序文

謝辞

序論

第1章 自閉症の哲学入門

自閉症者の声——ジム・シンクレア

- 1 自閉症に関する心の理論説、ならびにそれと競合する諸仮説  
23
- 2 人間の行動を説明する二つの仮説に対する自閉症からの試練  
41  
——理論説とシミュレーション説
- 3 自閉症と自己意識  
51
- 4 自閉症と言語の哲学——意味理論と心の理論  
62
- 5 自閉症と心のモジュール性  
77  
——心の理論、心的モジュール、ならびに自閉症の存在論

第2章 自閉症的人生の価値……………91

自閉症者の声——ウエンディ・ローソン

- 1 道徳共同体のメンバーに関するウォレンの立場 98
- 2 人間の能力に関するヌスバウムの立場 106
- 3 幸せの要素に関するスキャンロン、ヴィーチ、  
パーフィットの立場 112

4 人間的形態をした社会生活に関するホブソンの立場 121

5 過激な見解——道徳共同体のメンバーの資格がある人たちには  
認めないことに関するベンの立場 126

6 この過激な見解に対する反駁 137  
——他者が排除されるとき、何が失われるか

第3章 自閉症と道徳理論……………143

自閉症者の声——グニラ・ガーランド

- 1 ケネット——ヒューム説に対する反駁 153

2	ケネットによるカント説の慎重な受容と、ベンによる拒否	167
3	個別主義と一応の義務の倫理	177
4	非両立的な道徳理論から生ずる問題	186
	——成人の自閉症者は「完治」されるべきなのか？	

第4章 自閉症と遺伝学的技術……………193

自閉症者の声——ドナ・ウィリアムズ

1	親の自律性と、遺伝学的技術の使用に対する反論の失敗	201
2	障害に関する社会構成論	205
3	聾共同体論と、類比の失敗	211
4	自閉症と開かれた未来に対する権利	218
5	自閉症者の出生を防止するための男女の産み分け	230

第5章 自閉症者に対する研究……………239

自閉症者の声——テンプル・グランディン

1	カントの議論、功利主義の議論、そして原則主義と自閉症	246
2	自閉症と研究への同意能力	251
3	代理判断、最善の利益、失われた集団	257
4	自閉症的完全さの倫理	275
注	.....	281
監訳者解説（柴田正良／大井学／東田陽博）	.....	295
訳者あとがき——バーンバウム先生との出会い（重松加代子）	.....	317
参考文献		
事項索引		
人名索引		

## 凡例

- ・本書は Deborah R. Barnbaum, *The Ethics of Autism: Among Them, But Not of Them* (Indiana University Press, 2008) の全訳である。
- ・原著では節に番号が付されていないが、読みやすさを考えて節番号を加えた。
- ・原著における強調のためのイタリックは、傍点で示した。
- ・「」は引用文への原著者による挿入を示している。
- ・読みやすさを考慮して、原書にないへくを適宜補った。

## 日本語版への序文

私の弟、マイケルは、生まれたときからふつうとは違っていましたが、私たち家族にはそれがなぜだか分かりませんでした。彼に対する強い拒否感の一部は、分からないということから来るものでした。家族は、彼をふつうの学校に入学させました。というのは、私たちは、彼が同い年の他の子供たちに劣ることを決して認めなかったからです。私たちに励まされ、彼は、姉たちや両親と同じように大学に行きたいという強い願いを抱くようになり、六年という長い歳月をかけてようやく学位を取得しました。彼が育ったのは、ほとんどの人が自閉症について何も知らなかった時代です。自閉症という診断は滅多に下されず、そういう診断が下されても、それが何かは謎めいたままでした。確かにそれは私たち家族にとっても謎めいたものでした。弟がふつうとは違っていることはよく分かっていたのですが、なぜなのかははっきりしなかったのです。

その違いというのは複雑で、説明しがたいものでした。マイケルは大学を卒業しましたが、ジョー



クを理解できませんでした。彼は仕事に就き、自分のアパートに住みましたが、車を運転することはできませんでした。彼は、地域の行事に熱心でしたし、ボランティアにも積極的で、いつも慈善団体のために働いていました。彼と三〇秒も話をすれば、彼がふつうに育っていた人とは違うということがすぐに分かるのでした。彼はかつて大学の食堂での仕事を失ったことがあります。それは、ある夕方、皆が出て行った後で、キッチンが恐ろしく混乱していることに彼が気づいた時のことでした。彼は夜遅くまで一人で働き、すべてを整理し直し、仕事の出来栄に満足して出て行きました。彼が解雇されたのは翌朝です。早番の担当者が朝食を用意できなかったのは、新しく整理されたキッチンでは何も準備ができなかったからです。彼がついに自閉症だと診断された時、全体像がはっきりしてきました。それによって一つの診断名、一つの診断基準が与えられ、私たちと彼に、彼が何者であるかを告げたのでした。

しかし、「自閉症」という診断は十分ではありませんでした。彼が自閉症であるということを知ること、自閉症が何であるかを知るとは、異なるものです。そのため、私はもっと詳しくそれを知ろうとしました。サイモン・バロン・コーエンの著書、『自閉症とマインド・ブラインドネス』(Mindblindness: An Essay on Autism and Theory of Mind) が一九九五年に出版された時、より完全な全体像が見えてきました。バロン・コーエンの主張は、自閉症は「心の理論」の欠陥によって特徴づけられる、というものでした。自閉症者は、自分の心的状態と異なる心的状態を他の人々がもっていることを理解できない、というのです。もしバロン・コーエンが正しければ、マイケルは他の人々の信念や意図、欲求や願望に十分には気づいていなかったこととなります。彼にとって、他の人々が

何を考えているかを考えることは、困難だということですが、彼は思いやりがあり、誠実で優しいのですが、他の人々から見て失礼だとか我がままだとかと思われるようなことをしでかしそうな場合には、はっきりと彼にそう教えてやる必要があります。キッチンを整頓し直すことを彼がよく考えなかったのも、無理はありません。すべてがどこに収められているかということについて同僚たちにも彼ら自身の考えがあるということや、また、同僚に何も言わずに彼独自の整理の仕方を実行したら混乱が生じるだろうということは、彼、マイケルには決して思い浮かばないことなのですから。

私は、一つの鍵を手にし、それによって初めて私の弟に関する秘密を解き明かしたのです。哲学者である私にとって最も興味をそそられたのは、その鍵が心理学的な含みをもつだけではなく、哲学的な含みをもっていたことでした。結局のところ、倫理的な問いとは、私たちがどのようにに他の人々を扱うかを問う時にしばしば生じてくるものです。私たちがどのようにに人々を扱うかは、私たちがどのようにに彼らを理解するかにかかっています。もしマインド・ブラインドネス説が主張するように、自閉症者と非自閉症者との間で互いについての見方が異なるのだとしたら、このことは倫理学全体の景観を変えるでしょう。本書『自閉症の倫理学——彼らの中で、彼らとは違って』は、そのことの理解から書き上げられました。私の弟の行動に関するそのでの説明は、心理学的な説明を提供するだけでなく、倫理的な試練をも提起しています。私の願いは、本書がその試練に応える最初の一步となってくれることです。

二〇〇八年の夏の終わりに本書のオリジナル版が出版されて以来、私は世界各地の自閉症の人たちと会う機会を得ました。私はこれまで以上に、本書の結論、すなわち自閉症者には自閉症的完全さの

権利がある、つまり「完治（治癒）」されずに自分の人生をおくる権利がある、という主張が正しいことを確信しました。本書は、自閉症的完全さを支持する一つの議論、すなわちマインド・ブラインドネス説から引き出される一つの議論を提供するものです。しかし、二〇〇八年以降、私は少し見方を変えました。自閉症のユニークな特徴群は、実にさまざまな点で自閉症的完全さを支えているのです。マインド・ブラインドネスは一つの出発点にすぎない、ということを経験した。最近の自閉症研究の進展が示してくれました。

本書の出版以来、私は、多くの自閉症の人たちに出会ったことに加え、熱心で才能豊かな日本の研究者や通訳者の方々に巡り会いました。彼らが、本書の日本語版を実現してくれたのです。第一に、金沢大学の金沢教授に感謝しています。彼が最初に本書を見出し、日本語への翻訳を私に強く求めてきました。私は、光栄なことに、大井教授に二度にわたって金沢大学に招かれ、二度とも、とても楽しい時を過ごさせてもらいました。同じく金沢大学の柴田正良教授は、挑戦的な哲学議論を仕掛ける対話者であると同時に、思いやり深いホストでもあるという役を務めてくれました。柴田教授の哲学的明晰さは比類のないものでした。素晴らしい通訳の才能に恵まれた重松加代子さんを独り占めできたことは幸運でした。二度に渡る金沢滞在中の通訳を務めて頂いたことと同様に、彼女が本書の翻訳に果たした役割に対しても、格別の感謝の気持ちをごここに記しておきたいと思えます。彼女の才能は語学に留まりません。彼女は目利きの確かな文化大使でもあるのです。金沢大学のポストドク研究者、永田伸吾さんと哲学専攻の大学院生、相川隆行さんのお二人の留学を、セント大学で引き受けることができたのも嬉しいことでした。私が彼らから学んだのと同じくらい、彼らが私から学んでくれるこ

とを願っています。最後に、大井教授からの『自閉症の倫理学』日本語版の出版依頼を受け入れてくださった勁草書房に、感謝申し上げます。

日本の読者は、ほぼ四〇年前の私の家族とは違う視点から、自閉症を見ることができます。自閉症についてはまだ学ばねばならないことが沢山ありますが、自閉症は前より容易にそれと認識されるようになり、またよく理解されるようになりました。まだとうてい十分とは言えませんが、自閉症の子供も大人も、以前より多くの助けをあてにすることができるようになりました。自閉症児の親は、かつてほど孤立してはいません。自閉症については解明すべき多くの課題が残っています。私は、自閉症の倫理的課題を探究することによって、自閉症の謎がより理解できるようになることを願っています。

〔永田伸吾（熊本大学）、相川隆行（金沢大学）訳〕